

佳作

新しい事への挑戦

香川県 香川県立高松工芸高等学校二年 大村 葵

私は吹奏楽部でトロンボーンを吹いています。ですが、二年になった時、ユーホニアムを吹く人がおらず、掛け持ちで吹くことになりました。

初めは音色もひどく、トロンボーンと違うところもあり戸惑うことがたくさんありました。しかし楽しいと思う気持ちがあったからこそ練習を積み重ねていく内に段々と上達していききました。音程も音量も安定して出せるようになり、毎日吹くことが楽しく感じました。

七月に入り、コンクールに向けての練習が始まりました。初めてのソロが二つもあり、少し不安でした。

初めてコンクールの曲を合わせた時では、楽しく自由に吹くことができませんでした。しかしまだ上手く吹きこなすことが出来ず、もっと頑張ろうと思うことが出来ました。毎日練習をして、全員で合奏をしている時が楽しく、あきらめずに行うことができると思えました。ですが、毎日毎日練習をする内にソロの部分をどう吹けばいいのかわからなくなっていました。毎日吹いても思い通り

に行かず、自由に、楽しく吹くことができませんでした。合奏をする度に出来なくなっていくような気がして、曲を吹くことに対して自信を持つことが出来なくなりました。頭ではもっと自由に楽しんで吹こうと思うと同時に、失敗したら、吹けなかったらどうしよう、というマイナスイな考えが離れませんでした。

コンクールの二週間前があるホール練習でも、緊張が解けず、不安を持ったまま参加しました。一日目も二日目も自信を持たず、思った通りの演奏が出来ずとても悔しい思いをしました。三日目でも出来ず、皆の足を引っ張っているんだと思い、思わず泣いてしまいました。曲を吹くのも見るのも嫌になり、ユーホニアムという楽器に対しても嫌いになっていました。外で頭を冷やしていると友人に

「うんうん。分かるよ、私も苦しいもん。大丈夫。だって毎日頑張ってるの知ってるよ、だから自信もって自由に吹きな。」

と言われました。私はその言葉を聞いて、皆も苦しいことや悔しいと思うことがある。それでも皆も頑張っているのだと知ることができました。私は自分がとても情けないと思いました。三日目の録音の時、友人の言葉を思い出して、完ぺきじゃなくても自信をもって自由に吹けたらいいという気持ちで挑みました。すると、自分の思った通りの演奏をすることが出来ました。そのと

き私は一步前へ進めたように思えました。

その日から少しずつではありましたが、自分に自信を持ち、ソロの部分を吹けるようになっていきました。私はまたユーホニウムを吹く楽しさ、この曲を吹く楽しさに気づけたように思えました。

コンクールの一週間前では、最後の仕上げとして細かいところまで注意しながら吹くように意識していました。しかし、余計な緊張はなく、落ち着いて吹くことが出来ていました。コンクールの日が近くなるにつれ、わくわくしている自分もいました。

コンクールの前日はいつもより練習は少なく、慌ただしい日でした。しかし、メンバーの全員の顔が緊張というよりもイキイキしているのを見て、私はすごく嬉しく感じました。笑顔で演奏でも皆からは自信をもって吹いているんだと感じました。その日の夜はコンクールのことで頭がいっぱいになりました。

コンクール当日は朝早く、緊張よりも先に忙しさであまり感じませんでした。最後の合奏ではいつも通りに吹くことができ安心していました。ホールの方へ移動してからは、慌ただしく、落ち着く暇ありませんでした。自分たちの出番直前は少し緊張していて、そわそわしていました。前の団体が終わり、自分たちの出番となった時、ここですべてを出し切ろうと思えました。ソロに対してはまだ不安なところがあり、とても怖いとも感じま

した。演奏が始まり、初めの一音は思い切り吹くことができ順調でした。一つ目のソロでは、少し揺らぎ危ない状態でした。緊張で手が少し震えていました。挽回すべく二つ目のソロに向けて緊張をおさえていきました。心が落ち着き、二つ目のソロではいつも通りに吹くことができました。そして、演奏は終わりました。舞台を降りた後は一気に緊張がほどけ、皆笑顔で安心したようでした。

すべての団体が終わり、結果発表の時がきました。会場の全員が緊張した面持ちでした。どんどん結果が発表される中、自分たちの発表がきました。結果は金賞でした。その瞬間堰を切ったように泣き出してしまいました。私はこのコンクールを通して、新しいことを始めることで、今まで自分が知らなかったこと、大切なことを知ることができ、苦しいこと嫌になることがあっても嬉しいと思えることが多く、貴重な体験をすることができました。